

SCSによる大学間連合公開講座の挑戦と可能性

—「コーヒー学入門」の茨城大学における展開を例として—

佐々木 靖 章 菊 池 龍三郎 矢 内 結 香

Challenges and Feasibility of Open Classes in Japanese Universities through a Space Collaboration System: an Attempt of Ibaraki University on a new open class, "Introduction to Coffee Sciences."

I 茨城大学におけるコーヒー関連講座

茨城大学においては、平成9年度の公開講座の一つとして佐々木靖章を責任者として「コーヒーの歴史と文化—異文化理解のための一つの指標—」を開講した。コーヒー文化学会の支援をうけ、平成8年度金沢大学で開講の廣瀬幸雄教授主催の「コーヒー学入門—おいしく飲むための基礎知識—」をモデルにした。期日は平成9年9月6日、9月13日、9月20日、9月27日の各土曜日の4回、午後1時30分～4時30分である。受講料6,400円、受講資格制限なし、募集人数50人であった。講義者とテーマは以下のとおりであった。

9月6日・日本コーヒー文化学会副会長 畔柳 潤「コーヒーを楽しむために」

水戸市 喫茶店ブルボン経営 松永 晃「茨城のコーヒー戦後史」

9月13日・食評論家 小菅陽子「ヨーロッパにおけるお菓子とコーヒー（ウィーンの場合）」

茨城大学教授 佐々木靖章「戦前の珈琲雑誌と文学」

9月20日・いなほ書房経営 星田宏司「コーヒーの世界史」

金沢大学教授 廣瀬幸雄「コーヒーの科学」

9月27日・茨城大学教授 菊池龍三郎「生涯学習のルーツは珈琲店だった（イギリスの場合）」

ひたちなか市 サザコーヒー経営 鈴木誉志男「コーヒーの生産・流通・文化」

申し込み者数は55人（女37人，男18人，内茨城大学の学生2人，教職員3人）。全回出席者数32人，3回出席者数8人，申込み後の取消し1人，全回欠席者2人という結果で，出席率はきわめてたかかった。講義内容の豊富さはもとより，講義者による各種のサービスは受講者を一層引きつけた。コーヒー関係の各種資料が配布され，毎回鈴木さんと松永さんの提供によるコーヒー試飲のサービスが付き，畔柳さんと鈴木さんによるコーヒー豆のお土産，小菅さんによるビスコッテンの試食，松永さんによる世界のコーヒーの生豆60種類の展示とプレゼント，最終日には鈴木さんによる発芽して2ヶ月のコーヒーの木の提供もあった。

II 「コーヒー学入門」の開講

上述の平成9年度の「コーヒーの歴史と文化」の成果をうけて，金沢大学から平成10年度に「SCSによるコーヒー学入門」というタイトルによる大学間連合公開講座共催の要請があった時受諾するにいたったのである。茨城大学のSCSは平成9年に設置されたばかりで，利用

率もあまり高くなく、特に本講座のように全国の国立7大学（金沢大学、北海道大学、茨城大学、横浜国立大学、神戸大学、九州大学、鹿児島大学）が連携するような一般向けの公開講座利用は最初の試みであった。「スタジオ」と呼ばれている部屋は、定員は40人分程度しかなく、補助椅子をいれて60人余を確保するのが限界であった。そこで、今回は5か月余にわたる8回の開講ではあるが無料ということもあって、希望者が多くなるのを心配して、平成9年度の有料講座参加者を中心に宣伝をし、あとは関係者の口コミにまかせ、事前にマスコミ等には情報を流さなかった。それでも申込み数は67人であった。途中からの参加も一部認めため最終的に82人の参加があった。延べ受講者は350人、1回平均の受講者は43.75人、申し込んで1回も出席しなかった人は7人、1回だけの出席者は14人。5回以上の出席者に修了証を渡し、その数は53人であった。

毎回コーヒーの無料サービスが行われ、昨年の講座に続き、サザコーヒーの鈴木誉志男さん、ブルボンの松永晃さん等にお世話になった。途中で地元新聞に紹介記事も出た。茨城大学の教職員、特に教育学部の職員の方々には勤務外の休日、夜間もふくめて全面的な支援をうけた。SCSの機器の操作は8回にわたり主に矢内が行った。

6月27日（午後1時30分～16時30分）、茨城大学で行われた内容は以下のとおりである。

- ・菊池龍三郎「成人教育のルーツはコーヒー・ハウスだった—イギリスの場合—」
- ・佐々木靖章「成人教育の始まりはカフェ・ハウス—日本の場合、パウルスタからブラジレイロへ—」
- ・全日本コーヒー協会インストラクター
村上幸子「レギュラーコーヒーを使ったアレンジコーヒーの実演2」

しかし、実際にSCSを利用して大学間連合公開講座を実施してみると、各大学の態勢不備、取り組み姿勢の不十分さ、大学間の連絡不十分さ、技術的な未熟さなどで、トラブルはかなり多く、SCSの可能性を十分に引き出し得たとは必ずしも言えない、つまり、その意味でも今後さまざまな課題を残しているとも考えられる。そこで、本公開講座に個人的な資格で参加しながらも、その実施に中心的な役割を果たした矢内事務官が、公開講座の参加者を対象としてアンケート調査を実施し、その分析を試みた。本稿は、その結果の要約を中心として以下に報告するものである（佐々木記）

III. 調査の概要

1. 調査の目的

近年マルチメディアの急速な普及は、人々の生活の中でも様々な形態で浸透している。

平成9年12月18日には、大学審議会が『「遠隔授業」の大学設置基準における取り扱い等について（答申）』を出しているが、SCSを含むこれらマルチメディアの高等教育機関での利用については、その設備の充実とより積極的な活用が望まれている。

「コーヒー学入門」は、SCSを利用した実験的意味合いの強い公開講座であり、今回受講生の方々にアンケートをお願いし、その結果を分析することによって、受講者からみた大学におけるSCSの運用に際しての課題や問題点について考え、今後のSCS活用の在り方や制度上の問題について明らかにすることを目的として実施したものである。

2. 調査対象と回答数

SCS 公開講座「コーヒー学入門」実施大学の内、全回実施の金沢大学と茨城大学、7 回実施の鹿児島大学の受講生を対象とし、143名より回答を得た。

3. 調査時期と方法

平成10年6月～7月の第3～5回の講義において、上記3大学の担当者にアンケートの配布及び回収を依頼し、調査を実施した。

4. 受講生の全体像

各会場の受講生とも主婦が多く、年代的にも40才以上の中・高年代が多く見られた。

金沢大学に関しては、男性女性の比率がほぼ同数であること、鹿児島大学では年代層が20才から50才代の間でほぼ均一であることなどの特徴がみられた。

5. SCS 講座の内容に関する問題

SCS が開始されたのが平成8年度であることから考えれば、一般的にはなじみのないシステムであることは予想され、受講生の間ではSCSについての認識度は低かったものの、受講した感想は「よかった」と感じた受講生が多かったようである。

満足度に関しては、アンケートを実施した回の受信状況により、明暗を分けてしまった感がある。特に金沢大学においては受信状況が悪かったために、その回の印象が強く回答に現れてしまっているように思われる。理由についても、受信状態に対しての不満やトラブルに対する主催者側の対応の甘さを指摘されている。

講義時間に対しては、3時間もの長丁場ではあったものの、ひとつの講演の時間を50分前後とし、2回休憩を入れていること、最後の講義は主に実技的なもので、飽きさせない構成になっていたことや受講生の熱心さも手伝い、講義時間、休憩の取り方については、適当であったようだ。

講義内容については、満足と答えている受講生が9割近くいた。不満の理由については、先にもあった受信状態の悪さや質問が思うようにできないという2点に絞られた。

画像については、金沢、茨城に比べ、鹿児島大学においては半数が見えにくいと感じられたようだ。映像については、同じものが送信されている訳であるから、むしろ会場に配置されているモニターによるところが大きいと考えられる。

音声については、6割近くの受講生が聞き取りにくいと感じていた。画像で聞き取りやすいほうであると答えながらも、音声についてはどちらかという聞き取りにくいと答えた受講生が各大学で多くみられた。音声状態は受信大学側で調整するには限界があるため、発信大学側で、講師のマイクの配置や音声テストを念入りするなどの努力が必要かと思われる。実際、講義途中にマイクの位置を調整することによって改善されたことがあった。

書画カメラに対し、たいへん見えにくいと感じた受講生が多くなっているが、各会場で書画カメラにより、あらかじめ資料を映した状態を確認することは難しく、また、モニターに映し出す資料としては、あまり細かい図表や地図は適さないように感じられる。間に合うのであれば、あらかじめ事前に配布できるような配慮が必要である。無回答が増えているのは、設問の説明不足により、書画カメラの意味が受講者に伝わらなかったとも考えられる。

教室の広さについては、鹿児島大学では、全員が適当な広さと答えている。茨城大学では教室が狭いと感じた受講生が他大学に比べ特に多かった。

授業を複数の大学で衛星通信により受講する形式を、茨城大学では、9割以上がよかったと答えている。よくなかった理由としては、画像の見にくさや、質問の時間の短さなどをあげた受講生が多かった。

質問の時間はどうしても最後に設けられているため、講義が長引いてしまうと十分にとれず不満を残すこととなった。発信大学であれば、終了後に講師と直接話すこともあるいは可能であるが、受信大学では一方的に打ち切られてしまう感があり、余計に物足りなさを残してしまうようである。

新しいシステムであることで、カメラの操作に関しては教職員の方にも不慣れな点が多かったかと思う。また、カメラの位置により、映す範囲が限定されてしまうため、画像に偏りも生じた。

6. 大学の公開講座に対する質問

コーヒープレイクは「コーヒー学」ということで設けたものであるが、一般の方が長時間講義を受講するのには気分転換にもなり、また受講者同志の交流を深めるという点でもよかったのではないかと思われる。

スタッフの応対に対しては、トラブルも数回あり、受講生の方には迷惑をかけたにも関わらず、好印象をもっていただけたのはうれしい限りである。

生涯学習が浸透し、余暇の有効活用というよりも、むしろ自己啓発や学習意欲の高まりを感じる。今後も受講したいと考えている受講生が多く、その場合の基準はやはり内容である。大学側は今後、受講者がどんなものに対し、興味・関心があるか、知識を得たいと感じているかを的確に把握していく必要がある。

今後、公開講座に参加したいと思わないという回答者は、トラブル時の対応の悪さや、質問が思うようにできないことなどをあげている。むしろ対面式の講義の方がよいと考えているようだ。

7. 今後の課題

今回、SCS全般を振り返って、多くの反省点も出た。特にトラブル時の対処法であるが、基本的なマニュアルは操作者の手元にあるものの、あくまでも正常に作動しているの場合に過ぎず、トラブル時の対処法に関しては役に立つものではない。また、平日とは違い土曜日の午後の講座ということで、センターへの問い合わせや、大学間のやり取りも思うようにできなかった。大学間同志で、直接の電話回線があるにも関わらず、電話が操作者の手近なところがないため、連絡が取れない大学もあった。衛星回線の使用時間も厳しいため、主催者側は実際の講義に入る前に準備やテストの時間などの余裕をもち、万全の体制に備える必要がある。また、質問の機会の確保や、相互のやり取りのスムーズさは受講者の満足度を大きく左右する問題であるから、遠隔授業の場合特に考えなくてはならない点である。

IV. 調査結果

Q. あなたの性別は？

Q. あなたの職業は？

(男女別・職業別)

(%)

大学名		会社員	公務員	教員	主婦	学生	自営業	無職	その他	計
金沢大学	男	8(12.6)	6(9.5)	2(3.2)	2(3.2)	2(3.2)	2(3.2)	6(9.5)	3(4.8)	31(49.2)
	女	4(6.3)	3(4.8)	1(1.6)	16(25.4)	2(3.2)	1(1.6)	2(3.2)	3(4.8)	32(50.8)
鹿児島大学	男	3(8.8)	4(11.8)	1(2.9)	0(0.0)	1(2.9)	3(8.8)	1(2.9)	0(0.0)	13(38.2)
	女	2(5.9)	3(8.8)	0(0.0)	9(26.5)	0(0.0)	2(5.9)	2(5.9)	3(8.8)	21(61.8)
茨城大学	男	5(10.9)	4(8.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(4.3)	2(4.3)	0(0.0)	13(28.3)
	女	3(6.5)	2(4.3)	3(6.5)	16(34.8)	2(4.3)	0(0.0)	2(4.3)	5(10.9)	33(71.7)
全体計		25(17.5)	22(15.4)	7(4.9)	43(30.1)	7(4.9)	10(7.0)	15(10.5)	14(9.8)	143(100)

Q. あなたの年齢は？

(男女別・年代別)

(%)

大学名		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
金沢大学	男	0(0.0)	5(7.9)	2(3.2)	6(9.5)	5(7.9)	11(17.5)	2(3.2)	31(49.2)
	女	0(0.0)	3(4.8)	2(3.2)	5(7.9)	15(23.8)	7(11.1)	0(0.0)	32(50.8)
鹿児島大学	男	0(0.0)	5(14.7)	3(8.8)	1(2.9)	4(11.8)	0(0.0)	0(0.0)	13(38.2)
	女	0(0.0)	4(11.8)	5(14.7)	7(20.6)	5(14.7)	0(0.0)	0(0.0)	21(61.8)
茨城大学	男	0(0.0)	1(2.2)	3(6.5)	1(2.2)	5(10.9)	3(6.5)	0(0.0)	13(28.3)
	女	2(4.3)	5(10.9)	5(10.9)	5(10.9)	10(21.7)	6(13.0)	0(0.0)	33(71.7)
全体計		2(1.4)	23(16.1)	20(13.9)	25(17.5)	44(30.8)	27(18.9)	2(1.4)	143(100)

Q. SCS という言葉を知っていましたか？

(%)

大学名	知っていた	聞いたことはある	知らなかった
金沢大学	10(15.9)	15(23.8)	38(60.3)
鹿児島大学	5(14.7)	8(23.5)	21(61.8)
茨城大学	11(23.9)	11(23.9)	24(52.2)
全体計	26(18.2)	34(23.8)	83(58.0)

Q. SCS で他大学の講義を衛星回線を受講され、どのように感じられましたか？

(%)

大学名	大変よかった	よかった	あまりよくなかった	まったくよくなかった	わからない	無回答
金沢大学	5(7.9)	28(44.4)	23(36.5)	3(4.8)	3(4.8)	1(1.6)
鹿児島大学	5(14.7)	16(47.1)	8(23.5)	2(5.9)	1(2.9)	2(5.9)
茨城大学	15(32.6)	24(52.1)	4(8.7)	1(2.2)	1(2.2)	1(2.2)
全体計	25(17.5)	68(47.6)	35(24.5)	6(4.2)	5(3.5)	4(2.8)

Q. 講義時間については適当でしたか？

(%)

大 学 名	長すぎる	どちらかといえば長い	適当である	どちらかといえば短い	わからない	無 回 答
金 沢 大 学	1(1.6)	7(11.1)	53(84.1)	2(3.2)	0(0.0)	0(0.0)
鹿 児 島 大 学	0(0.0)	2(5.9)	28(82.3)	2(5.9)	0(0.0)	2(5.9)
茨 城 大 学	0(0.0)	5(10.9)	40(86.9)	0(0.0)	1(2.2)	0(0.0)
全 体 計	1(0.7)	14(9.8)	121(84.6)	4(2.8)	1(0.7)	2(1.4)

Q. 休憩の取り方についてはどうでしたか？

(%)

大 学 名	適当である	あまり適当ではない	まったく適当ではない	わからない
金 沢 大 学	59(93.7)	4(6.3)	0(0.0)	0(0.0)
鹿 児 島 大 学	32(94.2)	1(2.9)	0(0.0)	1(2.9)
茨 城 大 学	43(93.5)	2(4.3)	0(0.0)	1(2.2)
全 体 計	134(93.7)	7(4.9)	0(0.0)	2(1.4)

Q. 講師の講義内容について満足されましたか？

(%)

大 学 名	たいへん満足している	どちらかといえば満足している	どちらかといえば不満である	満足しなかった	わからない	無 回 答
金 沢 大 学	14(22.2)	42(66.7)	5(7.9)	1(1.6)	1(1.6)	0(0.0)
鹿 児 島 大 学	3(8.8)	23(67.6)	4(11.8)	0(0.0)	0(0.0)	4(11.8)
茨 城 大 学	18(39.1)	25(54.3)	1(2.2)	0(0.0)	1(2.2)	1(2.2)
全 体 計	35(24.5)	90(62.9)	10(7.0)	1(0.7)	2(1.4)	5(3.5)

Q. SCSによる画面（映像）についてはどう思われましたか？

(%)

大 学 名	とても見やすかった	見やすい方であった	少し見づらかった	たいへん見えにくかった	無 回 答
金 沢 大 学	4(6.3)	32(50.8)	26(41.3)	1(1.6)	0(0.0)
鹿 児 島 大 学	2(5.9)	13(38.2)	16(47.1)	1(2.9)	2(5.9)
茨 城 大 学	4(8.7)	25(54.4)	14(30.4)	2(4.3)	1(2.2)
全 体 計	10(7.0)	70(49.0)	56(39.2)	4(2.8)	3(2.1)

Q. SCSによる音声についてはどのように思われましたか？

(%)

大 学 名	大変聞き取りやすい	聞き取りやすいほうである	どちらかという聞き取りにくい	まったく聞き取りにくい	わからない
金 沢 大 学	0(0.0)	21(33.3)	35(55.6)	5(7.9)	2(3.2)
鹿 児 島 大 学	2(5.9)	9(26.5)	19(55.8)	2(5.9)	2(5.9)
茨 城 大 学	4(8.7)	18(39.1)	23(50.0)	1(2.2)	0(0.0)
全 体 計	6(4.2)	48(33.6)	77(53.8)	8(5.6)	4(2.8)

Q. 書画カメラ等を使った資料の提示についてはどう思われましたか？ (％)

大 学 名	とても見やすかった	見やすいほうである	少し見づらかった	たいへん見えにくかった	無 回 答
金 沢 大 学	2(3.2)	29(46.0)	18(28.6)	7(11.1)	7(11.1)
鹿 児 島 大 学	2(5.9)	9(26.5)	16(47.0)	3(8.8)	4(11.8)
茨 城 大 学	5(10.9)	17(37.0)	18(39.1)	3(6.5)	3(6.5)
全 体 計	9(6.3)	55(38.5)	52(36.3)	13(9.1)	14(9.8)

Q. 今回受講された教室はSCSを受けるのに適当な広さでしたか？ (％)

大 学 名	適当である	広すぎる	狭すぎる	わからない	無 回 答
金 沢 大 学	54(85.7)	3(4.8)	2(3.2)	4(6.3)	0(0.0)
鹿 児 島 大 学	34(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
茨 城 大 学	27(58.7)	0(0.0)	16(34.8)	2(4.3)	1(2.2)
全 体 計	115(80.4)	3(2.1)	18(12.6)	6(4.2)	1(0.7)

Q. 今回のように発信された授業を複数の大学で衛星通信により同時受講する形式についてはどう思われましたか？ (％)

大 学 名	たいへんよかった	よかった	あまりよくなかった	まったくよくなかった	わからない	無 回 答
金 沢 大 学	18(28.6)	28(44.4)	11(17.5)	1(1.6)	5(7.9)	0(0.0)
鹿 児 島 大 学	13(38.3)	14(41.2)	4(11.8)	1(2.9)	1(2.9)	1(2.9)
茨 城 大 学	23(50.0)	20(43.4)	1(2.2)	1(2.2)	0(0.0)	1(2.2)
全 体 計	54(37.8)	62(43.3)	16(11.2)	3(2.1)	6(4.2)	2(1.4)

Q.SCSによる質問の受け方、答え方の様子についてはどう思われますか？ (％)

大 学 名	たいへんよかった	よかった	あまりよくなかった	まったくよくなかった	わからない	無 回 答
金 沢 大 学	2(3.2)	43(68.2)	10(15.9)	2(3.2)	5(7.9)	1(1.6)
鹿 児 島 大 学	3(8.8)	17(50.0)	7(20.7)	1(2.9)	5(14.7)	1(2.9)
茨 城 大 学	4(8.7)	28(60.9)	9(19.6)	0(0.0)	3(6.5)	2(4.3)
全 体 計	9(6.3)	88(61.5)	26(18.2)	3(2.1)	13(9.1)	4(2.8)

Q. カメラの動きや切り替えは適切でしたか？ (％)

大 学 名	適切である	どちらかといえば適切	やや不適切	不適切	無 回 答
金 沢 大 学	5(7.9)	25(39.7)	22(34.9)	8(12.7)	3(4.8)
鹿 児 島 大 学	1(2.9)	11(32.3)	14(41.2)	4(11.8)	4(11.8)
茨 城 大 学	7(15.2)	21(45.6)	13(28.3)	4(8.7)	1(2.2)
全 体 計	13(9.1)	57(39.8)	49(34.3)	16(11.2)	8(5.6)

Q. コーヒーブレイクの設置についてはどう思われますか？ (％)

大 学 名	大変よかった	よ っ た	あまりよくなかった	必要でない	わからない
金 沢 大 学	30(47.6)	32(50.8)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.6)
鹿 児 島 大 学	20(58.9)	13(38.2)	1(2.9)	0(0.0)	0(0.0)
茨 城 大 学	28(60.9)	14(30.4)	1(2.2)	1(2.2)	2(4.3)
全 体 計	78(54.5)	59(41.3)	2(1.4)	1(0.7)	3(2.1)

Q. スタッフの対応についてはいかがでしたか？ (％)

大 学 名	大変よかった	よ っ た	あまりよくなかった	まったくよくなかった	わからない
金 沢 大 学	36(57.1)	22(34.9)	2(3.2)	0(0.0)	3(4.8)
鹿 児 島 大 学	14(41.2)	18(52.9)	2(5.9)	0(0.0)	0(0.0)
茨 城 大 学	35(76.1)	10(21.7)	1(2.2)	0(0.0)	0(0.0)
全 体 計	85(59.4)	50(35.0)	5(3.5)	0(0.0)	3(2.1)

Q. 受講の目的・動機は次のどれに当たりますか？ (複数回答) (％)

大 学 名	職業上の知識 等を増すため	教養・知識を 高めるため	興味・関心を もっていたため	日常役に立つと 思ったから	余暇を有効活用 するため	そ の 他
金 沢 大 学	4(6.3)	23(36.5)	31(49.2)	9(14.3)	6(9.5)	1(1.6)
鹿 児 島 大 学	9(26.5)	9(26.5)	18(52.9)	3(8.8)	6(17.6)	0(0.0)
茨 城 大 学	2(4.3)	12(26.1)	34(73.9)	5(10.9)	4(8.7)	0(0.0)
全 体 計	15(10.5)	44(30.8)	83(58.0)	17(11.9)	16(11.2)	1(0.7)

Q. 大学における公開講座を今後も受講してみたいですか？ (％)

大 学 名	ぜひ受講してみたい	条件があれば受講してみたい	受講したいと思わない	わからない
金 沢 大 学	27(42.9)	34(53.9)	0(0.0)	2(3.2)
鹿 児 島 大 学	13(38.2)	21(61.8)	0(0.0)	0(0.0)
茨 城 大 学	23(50.0)	22(47.8)	1(2.2)	0(0.0)
全 体 計	63(44.1)	77(53.8)	1(0.7)	2(1.4)

Q. 受講するとした場合選択の基準となるものは次のどれに当たりますか？ (複数回答) (％)

大 学 名	講座内容	開設日時 ・時間帯	内容の レベル	講 師	受講者の 対象	受講料	講義形態
金 沢 大 学	52(82.5)	21(33.3)	7(11.1)	7(11.1)	3(4.8)	7(11.1)	1(1.6)
鹿 児 島 大 学	29(85.3)	16(47.1)	2(5.9)	1(2.9)	2(5.9)	6(17.6)	1(2.9)
茨 城 大 学	39(84.8)	25(54.3)	3(6.5)	5(10.9)	2(4.3)	4(8.7)	4(8.7)
全 体 計	120(83.9)	62(43.4)	12(8.4)	13(9.1)	7(4.9)	17(11.9)	6(4.2)

Q. 今後 SCS を使った講座等があれば参加してみたいと思いますか？

(%)

大 学 名	積極的に参加したい	参加したいと思う	あまり参加したいと思わない	参加したいと思わない	わからない	無 回 答
金 沢 大 学	12(19.0)	36(57.1)	4(6.3)	2(3.2)	9(14.3)	0(0.0)
鹿 児 島 大 学	7(20.6)	21(61.8)	1(2.9)	2(5.9)	1(2.9)	2(5.9)
茨 城 大 学	13(28.3)	27(58.7)	2(4.3)	1(2.2)	2(4.3)	1(2.2)
全 体 計	32(22.4)	84(58.7)	7(4.9)	5(3.5)	12(8.4)	3(2.1)

(矢内記)

V SCS 利用の大学間連合公開講座の課題

SCS を設置した各大学とも、それをどう活用するかについては、まだ実験的段階にあり、実践的なデータが決定的に不足している状態にある。まして、複数大学が連合してひとつのテーマのもとで授業を展開していくとなると、その運営に関して参考になる先行例はほとんどないといってよい。今後は単位互換等大学間での共同事業の増加が予想されるため、一層経験に基づくデータの収集は不可欠である。

金沢大学をキー大学にして実施した今回の大学間連合公開講座の事業については、以上の結果からも、さまざまなトラブルや運営上の不手際があったにもかかわらず、大部分の参加者は、SCS を利用した大学間連合公開講座を「よかった」と評価している。

しかし、それぞれの大学の受信状況の違いによって評価は大きく分かれていることにも留意すべきである。特に、開始時間になっているにもかかわらず画像が送られてこない等のハプニングがあり、それに対して大学側が迅速に対応できなかった場合、評価はかなり低くなっている。たとえば画像が送られてこない場合、送り手に連絡しようとしても、その連絡先が会場とは離れた事務局等にあり、しかもその日が土曜日の場合、事務官はそこには誰もいないわけであるから、緊急連絡は届かないこともある。その意味からも、SCS を有効に活用する大学内、大学間の体制づくりが是非望まれるのである。

講義内容については満足度が高かったが、これも受信状態の良し悪しが影響しているとみてよい。

さらに受信状態に関連する問題としては、まず音声については、多くの受講生は低い評価しか与えていない。画像についてもさまざまな問題がある。たとえばテレビ放送などでは、複数のカメラを使うし、しかも固定カメラとポータブルカメラを併用するわけであるから、その時々講義内容に応じてカメラを切り換えるわけである。しかし今回の場合、カメラは1台で、しかもその位置が固定しているため参加者から見にくかったり、画面が平板な印象が強かった。今後は複数のカメラを考えるべきだし、カメラワークについての一定水準の技能の習得も不可欠となる。

書画カメラについても問題が少なくない。予めカメラに資料を映し出しておいて映像の映り具合をチェックすることができなかった。これは、一つには、映像受信開始と共に講義も始まってしまうため、受信状況の良し悪しを予めチェックできないためでもある。講義が開始されて、つまり映像が映し出されてはじめて、映像状態が分かるという仕組みになっていることにもよる。有料のため、事前に受信状況をチェックできにくいとはいえ、出たとこ勝負、開けてみないと分からないといった感じの現在のやり方には問題がある。

講義の進め方に関しては、質問の時間がもっと必要であるとの要望も強い。講師にもっと尋ねたいと思っはいても、現在のやり方では、時間になると一方的に打ち切られてしまうため、物足りなさを感じてしまう。しかし、毎回3時間という時間は決して短くはないはずであるから、その意味では、講義の展開の仕方をもっと工夫する必要があると考える。

教室の広さについては、特に茨城大学等で不満が強かった。今後、SCSを利用しての大学間連合公開講座等を実施する場合、より広いスペースを用意する必要があると考えられる。

今回の調査からも、ほとんどの参加者はこの企画に対して高い評価を与えてはいる。しかし同時に参加者の多くがさまざまな問題点を指摘し、希望や要望を出していることも事実である。そうしたさまざまな問題点をきちんと整理し、適切に解決を図ることが今最も必要なことであると考え。これからのことも含めて、今後SCSを活用して大学間連合公開講座を実施する場合、まだ多くの課題があることが明かとなった。

(菊池記)